令和3年度　環境で地方を元気にする
地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業

成果報告会　発表資料

活動団体の本事業への関わり

今年度より"環境整備"に取組む	
昨年度から引き続き"環境整備"に取組む	
昨年度までの"環境整備"を経て、今年度より事業化に取組む	
昨年度までの"環境整備"と"支援チーム派遣（事業化支援）"を受けて引き続き事業化に取組む	✓

活動団体名：宮古島市

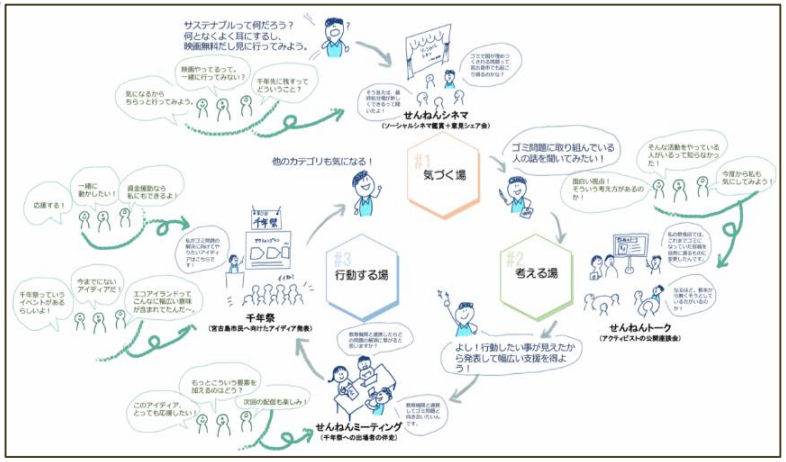
活動地域　：宮古島市

活動におけるテーマ・キャッチコピー

持続的な島づくりのためのプロジェクト支援と自立的な支援体制構築

活動団体紹介・目指す地域の姿

- 宮古島市は、四方を海に囲まれた隆起珊瑚礁からなる平坦な島で、大きな河川等は無く、台風や干ばつを受けやすい厳しい自然環境にある。（人口：約55,000人、面積：約205㎢）
- また、地下水に依存しており、生活のみならず農業においても水は貴重なものだった。そんな宮古島の地下水が平成元年に硝酸態窒素濃度の上昇があり、そのことから環境に対する意識の向上があった。2008年に「エコアイランド宮古島宣言」を行い、環境保全・資源循環・産業振興の三本柱で様々な取組を進めてきた。
- 地域循環共生圏事業に取り組むきっかけは、近年の急激な観光客の増加がもたらしたオーバーツーリズムにより生活や環境に対する不安や不満感が市民の間に生じた。環境と社会と経済とのバランスを考えた取組を進める必要性を感じたことから、令和元年度より本事業に取り組んできた。
- 本事業の特設サイト：https://sennen-pf.studio.site/
- エコアイランド公式サイト：https://eco-island.jp/



地域のありたい未来の実現のために 今年度取り組んだこと①

事業名称	「せんねん祭（千年先の宮古島市に向けた、アイディア発表会）」
事業のあらすじ・ストーリー	これまでの取組を更に強化すべく、持続可能な島づくりに寄与する新たな市民プロジェクトの伴走支援と、それに向けた市の雰囲気を醸成するイベントを同時並行で実行することで、市民・民間・役所が一体となったエコアイランド宮古島の実現に向けた事業を行う。
今年度の取組	今年度、新たな取組として「せんねんシネマ」「せんねんトーク」「せんねんミーティング」「せんねん祭」といった様々な取組を実行した。 ⑴「せんねんシネマ」：ソーシャルシネマ（社会課題を扱う映画）を市民と共に鑑賞し、宮古島市の持続可能性について知る場。 ⑵「せんねんトーク」：宮古島市内で活動する方をゲストに招き、事務局との対話を通して、活動を紐解き、事業の背景や、持続可能な島づくりとの関連について学ぶ場。 ⑶「せんねんミーティング」：2月開催の「せんねん祭」に向けて、出場者が自身のアイディアを事務局とともにブラッシュアップしていく取組。その会議の様子をオンラインで配信及びアーカイブできるようにした。 ⑷「せんねん祭」：千年先の宮古島市に向けた新たな市民アイディアを発表する日として実施するこれまでの事業の集大成イベント。発表されたアイディアに対する賛同の声を集める期間を設け、市民参加のできるイベントとして実施した。 コロナ禍であることから、それぞれのイベントは現地開催やオンライン開催を都度調整しながら実施した。参加する市民との対話の時間を大切にし、持続可能な島づくりを進めることの意義を共有できるよう努めた。今年度からスタートした新たな取組であることから、市民への周知を図るためＨＰや新聞等を積極的に活用したが、参加が少ない回もあった。事業の取組を紹介する手段の必要性から、新たなポータルサイトを構築するなどした。
進捗状況	当初の目標としていたイベント等を実行することができた。特に「せんねん祭」においてお二人の市民からの新アイディア発表を実施して頂けたことは、大きな成果と感じている。

今年度の取組を通じて得た気づきや課題

- プラットフォーム構築・運営にあたり、「知る・深める・始める・生み出す」をコンセプトに、「せんねんトーク」や「せんねんシネマ」といったイベントを軸に、市民を巻き込みつつ、市民のアイディア発表イベントである「せんねん祭」に繋げていく事業を実施した。
- また、プラットフォームの取組を継続する手法として、財団法人を設立することを念頭にいくつかの財団法人等へのヒアリングを行った。
- プラットフォーム構築・運営においては、各イベントにおいて、共通のテーマのもと実施した。特に、「せんねんシネマ」「せんねんトーク」は各回のテーマを連動させるなどし、イベント参加に対するメリットが高まるよう工夫した。
- しかしながら、参加者が少ない回があったことから、イベントの進行や実施時間等、今年度の経験・反省を次年度に活かしたい。
- 財団法人設立に向けたヒアリングでは、リモートでの実施に加え、現地視察も行った。東近江市の三方よし基金に関わる関係者の皆様の連携力や、企画力、実行力を実際に視察ができ、直に現地で学ぶことの大切さを改めて感じた。
- 特に、プロジェクトにおいて「誰が」実行するのかが、明確となっていること。また、キープレイヤー自身が、人や情報等を繋ぐ役割があった。その存在がプラットフォームとして機能をしている点が大変参考となった。

今後の展望

- 1年目においては、多数の地域ワークショップの実施や、宮古島市版マンダラ作りを通して、「ありたい姿」を描くことを通じて市民との対話の重要性を認識した。
- 2年目では、市民・民間・行政が連携し、取組を進めていくためのプラットフォームを構築に向け取り組んだ。明確な手法がわからない時期もあったが、事業を共に進める「コアメンバー」や、ご助言を頂いている龍谷大学深尾教授や、MURCとのミーティングにより深い議論が実施できたからこそ、財団法人設立を目指すということが定まった。
- 今年度は、宮古島市で新たな市民プロジェクトを創出するプラットフォーム構築と運営に尽力をした。市民との対話の場や、発信、また「せんねん祭」で市民からの新アイディア発表など、実際にイベントを実行することで、更なる市民の巻き込みや民間との連携を探るきっかけが生まれた。事業は次年度以降も継続をしていく予定。
- 財団法人設立に向けた初動と設立後の課題や財政面の工夫などについて、財団法人設立と運営に携わっている世田谷区コミュニティ財団の水谷様にアドバイザーとして入って頂き定期的に進捗確認やアドバイスをいただいた。その他リモートにより泉北ニュータウンやみらいファンド沖縄、海士町の阿部様に取組のヒアリングを実施。
  東近江市の三方よし基金へはリモートに加え現地視察を行った。
- 次年度は、財団法人設立に向け収集した情報活用し、市民や民間を巻き込みながら法人設立の機運を高めて実現したい。